5.交流の場としての子ども食堂
～みずほみんなの食堂報告書～

明美佐季

本稿は「交流の場」という観点からみずほみんなの食堂での活動を通して子ども食堂の役割を考察するものである。子ども食堂というと一般的に貧困の子のためにあるといったイメージがある。おそらくほとんどの子ども食堂を開催する人はそこに貧困に困っている人が来たならその人のために色々と手を尽くすだろう。しかし、貧困とは縁遠いような地域で行われている子ども食堂もある。そこにやってくるのは「普通」の子ども達である。そのような子ども食堂に求められるのは食事を通し人と人を結びつける交流の場になることではないだろうか。今回調査の対象であるみずほみんなの食堂はお店でも公共施設でもなく普通の民家で開催されている。静かに並ぶ住宅の中で何の変哲もない民家が「子ども食堂」になる。愛知県にある子ども食堂の中では異色の存在である。参加者については毎回人数にばらつきがあるが、何回も参加している参加者がいることからその人にとってみずほみんなの食堂は必要な存在であると考えることができる。参加者が少ないため開催できなくなった子ども食堂はもしかしたら誰かにとっては必要な場所だったかもしれない。このことを愛知県にある子ども食堂のうちの１つであるみずほみんなの食堂の活動への参加を通して考察していく。

１.始めたきっかけ

みずほみんなの食堂が開催されている瑞穂区は比較的経済的に豊かな家庭が多い地域である。そして一人で暮らしている高齢者の方が多い地域でもある。そのため子どもたちだけではなく、地域に住む高齢の方の居場所にもなることを目指してみずほみんなの食堂が開始された。運営スタッフのうちの一人の家を利用して開催している。

２.開催日時・メニュー・プログラム

みずほみんなの食堂は月に１回、土曜日か日曜日の 11 時から 15 時までの開催である。子どもの場合、午前中は工作や軽い調理をした後食事を取り、その後ゲストを招いて 20 分ほどの催し物をする。催し物が終わると午前中の工作の続きやみずほみんなの食堂にある、または子どもたちが持ち込んだゲームやおもちゃで遊んでいる。イベント的要素が強い。他の大人の参加者は近くで子どもの面倒を見たり、高齢者の方は他の参加者の高齢者と歓談して子ども達の様子をのんびり眺めていたりする。参加費を子どもは 200 円、大人は 300 円としている。食事に関してはアレルゲンになりそうなものを使わないように配慮している。一人一人おかわりができるように量は少なめによそって、まぜごはんがメニューにある日はまぜごはんが食べられない人のために白ご飯が用意されている。食事には味噌汁が用意されていることが多く、汁物に関しては味噌汁が好評のようである。

2016 年 8 月 30 日（月）11:00～15:00

メニュー:カレーライス、味噌汁
プログラム: 午前中に新聞紙工作・紙万華鏡を作り、昼食後絵本読み聞かせが行われた。

2016 年 9 月 25 日（日）11:00～15:00
メニュー:和風麻婆豆腐、コロコロサラダ、味噌汁、ごはん
プログラム:午前中に 折り染めミニノート作り・モンタージュ漫画などを作成し、昼食後絵本の読み聞かせが行われた。

2016 年 10 月 30 日（日）11:00～15:00
メニュー:まぜごはん、サラダ、汁物、ゼリー
プログラム: 午前中にハロウィンおりがみ・びっくり箱を作り、昼食後手品・絵本の読み聞かせが行われた

2016 年 11 月 20 日（日）11:00～15:00
メニュー:カレーライス、ポテトサラダ、味噌汁
プログラム:午前中に円盤こま作り、お手玉やあやとり、トランプの遊びをした後に昼食を食べてその後絵本の読み聞かせが行われた。

2016 年 12 月 18 日（日）11:00～15:00
メニュー:ちらし寿司、鶏肉と大根の煮物、サラダ、味噌汁
プログラム:クリスマスコンサートを行い、絵本の読み聞かせなどもあった。

2017 年 1 月 29 日（日）11:00～15:00
メニュー:餅、豚汁
プログラム: 餅つきと外遊びをした

2017 年 2 月 19 日（日）11:00～15:00
メニュー:カレーライス、味噌汁
プログラム: 午前中におこしものづくり、昼食後にお話、手品、わらべ歌、絵本の読み聞かせなどが行われた。

2017 年 3 月 26 日（日）11:00～15:00
メニュー:まぜごはん、麺サラダフルーツ添え、味噌汁
プログラム:午前中にプラ板工作を行い、昼食後お琴演奏や絵本の読み聞かせなどが行われた。

2017 年 4 月 16 日（日）11:00～15:00
メニュー:おはぎ、肉団子と根菜、豆サラダ、味噌汁
プログラム:野菜植え付け・大型絵本・絵本の読み聞かせなど

2017 年 5 月 28 日（日）11:00～15:00
メニュー:ポトフ、フルーツとスナップえんどうのサラダ、餅
プログラム：午前中に紙に折り染めと野菜の水やり、食後に絵本の読み聞かせをした後に午前中に染めた紙でうちわを作った。

2017 年 6 月 18 日（日）11:00～15:00
メニュー: 豚肉と野菜の蒸し物、サラダ、根菜の味噌汁、ごはん
プログラム:午前中におもちゃ（大根鉄砲や紙コップロケットなど）の作成と野菜の水やり・収穫、食後に落語を聞いた。

2017 年 7 月 16 日（日）11:00～15:00
メニュー: 夏野菜カレー、サラダ、味噌汁、白玉団子
プログラム:午前中に白玉作り、食後に軽く体遊びを行った後にハーモニカの演奏を聞いた。

2017 年 8 月 26 日（土）11:00～15:00
メニュー: 夏野菜カレー、そうめんサラダ、かぼちゃニョッキ入りスープ
プログラム:午前中は紙コップでクラッカーを作成の後食事に入れるニョッキの形を作り、食後はストーリーテーラーを聞いてからペットボトルのトロフィーを作った。

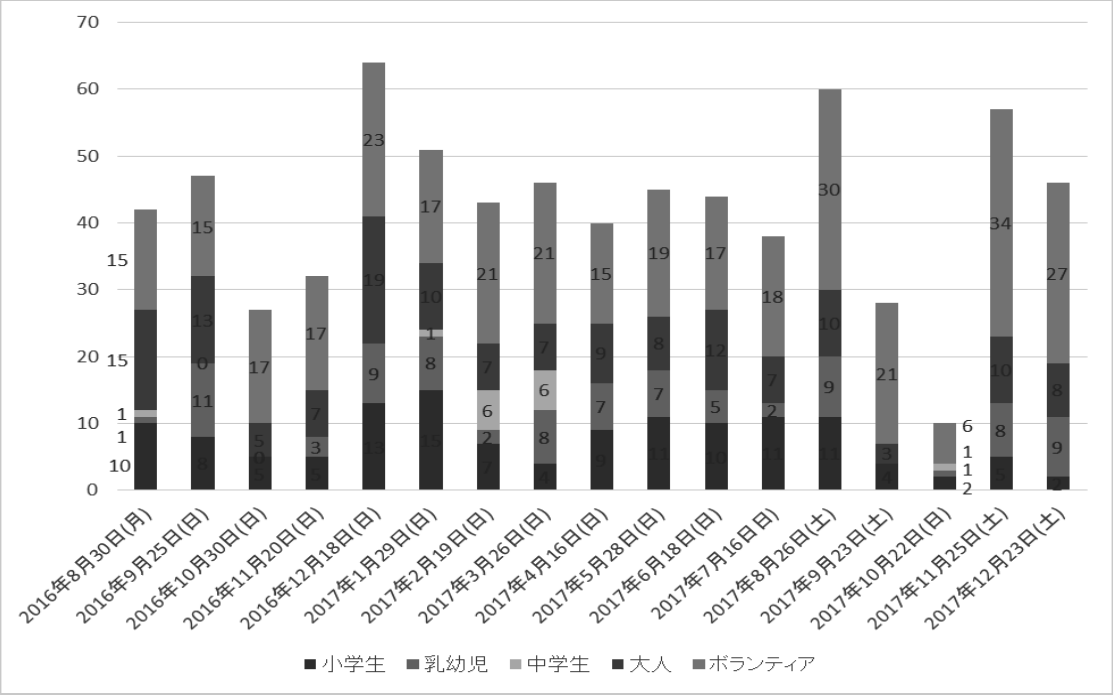
2017 年 9 月 23 日（土）11:00～14:00
メニュー: まぜごはん、とうがんのそぼろあんかけ、味噌汁、トマト、梨
プログラム:午前中は野菜スタンプと一部の参加者は近くの公園で遊び、食後はマジックと絵本の読み聞かせだった。この回は 1 周年の集いがあったためいつもより 1 時間早く終了している。

2017 年 10 月 22 日（日）(台風で本来は中止だが、告知をしていなかったため当日に来た子どもたちの対応はしている)
メニュー:ごはん、卵とじ、こふき芋、味噌汁

2017 年 11 月 25 日（日）11:00～15:00
メニュー:ごはん、肉じゃが、コロコロサラダ、味噌汁、柿のコンポート
プログラム:午前中はゼリー作りと米つきを体験して、昼食後に沖縄民謡演奏を聞いた。

2017 年 12 月 23 日（日）11:00～15:00
メニュー:まぜ寿司、肉団子と大根の煮物、味噌汁、ポテトサラダ
プログラム:午前中にホットケーキを作り昼食後に桜花学園の生徒たちのハンドベルの演奏を聞いた後おやつとしてホットケーキを食べた。

３.参加者グラフ



参加者は赤ちゃんから小学生、高齢者までと幅広い。子どもの参加者の年齢層は低く、小学校低学年以下の参加者が多い。そのため付き添いとして保護者が一緒に参加することも少なくない。中学生の参加は 2017 年 4 月 16 日からない。参加者の人数は安定しておらず、子どもの数は少ないがほぼ毎回参加しているという子どももいる。高齢者の参加は毎回あるわけではないが、チラシを見て来たという人が何人かいた。ボランティアの人数が参加者の人数に対して多く、参加者の人数より多い月すらある。学生のボランティアはほぼ毎回いる。開催するたびに様々な年代の人達が集まっている。

4.参加者の主な居住地、学区

主に汐路小学校、御劔小学校、高田小学校、愛知教育大付属名古屋小学校、瑞穂小学校の子ども達が来ている。特に汐路小学校の子どもの参加者が多い。開催場所の学区は汐路小学校の学区に入っているためと考えられる。汐路学区は瑞穂区にある学区の中では高齢者の数は比較的少なく、子どもの数は平均である。単独世帯が多く、これは近くの大学に通う一人暮らしの学生が関係していると考えられる。高齢者の参加者に関しても瑞穂区に住んでいる人がほとんどである。

5.課題

大勢の人の出入りを想定されていない古い民家で開催されているため、子どもが自由に遊ぶには少々不向きな場所である。参加者の駐車場もあまり多く確保できず、近くのコインパーキングに案内するしかない。食事を提供するだけではなく午前中に工作など取り入

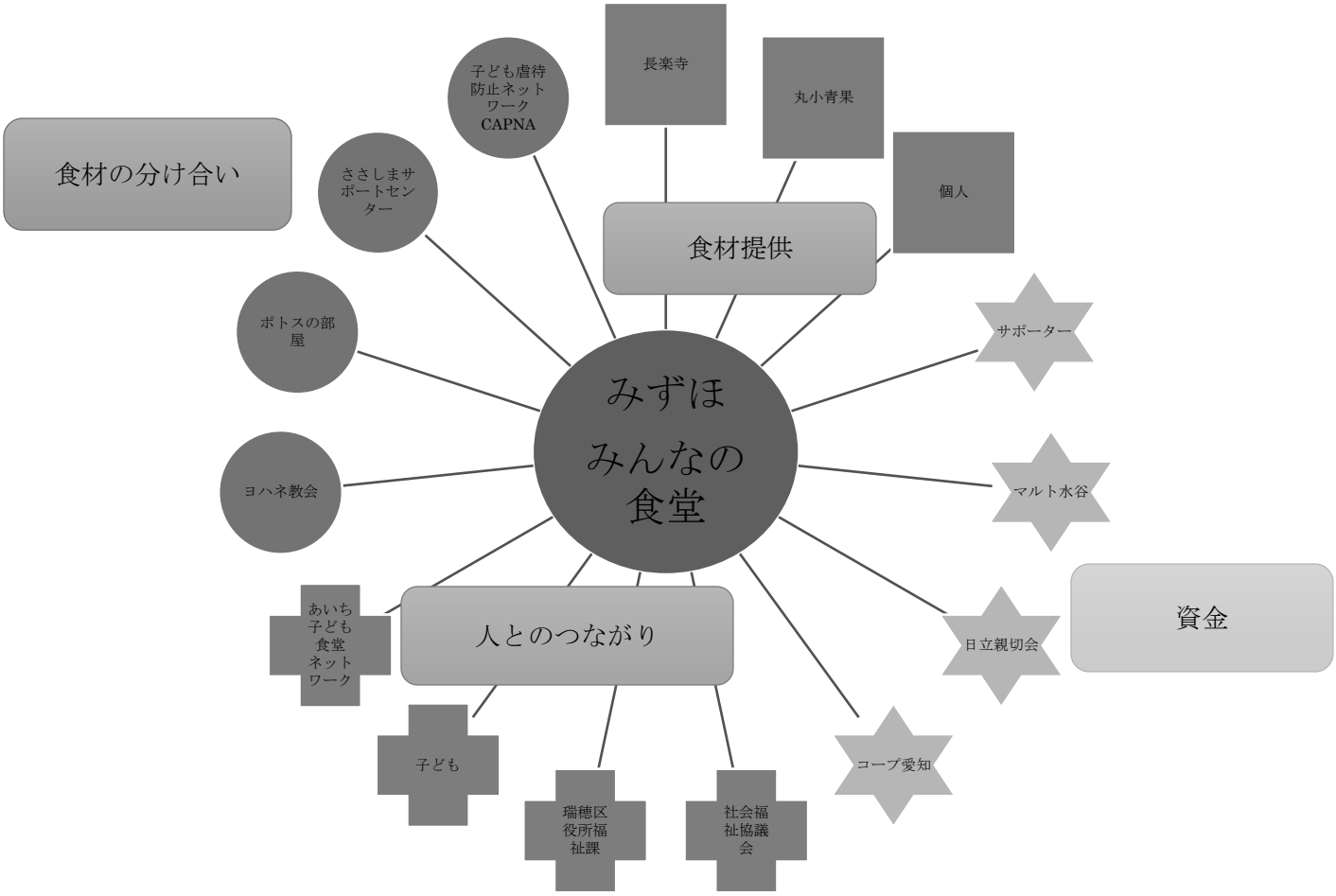
れているが、簡単なものになると飽きてくる子どもが出てきて遊びが足りない様子になる。特に硝子戸の近くや急な階段などでは目を光らせなければならない。みずほみんなの食堂は子どもだけではなく地域の高齢者の方も受け入れているが、参加はあまり多くない。コンセプトにある「居場所」にはまだなりきれていない。高齢者の方も気軽に訪れることができるように、みずほみんなの食堂を高齢者の場へのアピールを強くする必要がある。ボランティアとして参加することも居場所の一つになるかもしれない。

6.子ども食堂を継続するための工夫

みずほみんなの食堂は毎月チラシ作成し、近隣の住宅や保育園、小学校などに配布している。チラシには開催日時や食堂の内容、地図などが掲載されている。場所がわかりやすいように玄関には暖簾がかけられている。SNS にもアカウントを開設し、食堂の様子や開催日時などの情報を流している。そのかいあってかボランティアとして参加する人の人数は増加傾向にある。事前にその日の担当別にミーティングを行い戸惑うことも少なく、ボランティア同士の接し方も和やかである。開催のたびに見つかる小さな問題点も随時改善されていく。

7.関係者マップ

資金はサポーターや企業からの寄付や参加者とボランティアからの参加費、食材の提供は長楽寺、丸小青果、その他個人の方から受けている。みずほみんなの食堂で食材が余った場合は、スタッフに各団体に知り合いがいた関係で繋がった学習支援団体のポトスの部屋やホームレス支援団体のささしまサポートセンター、子ども虐待防止ネットワークに届けている。なるべくサロン活動をしている団体と繋がりたいと考えており、ヨハネ教会とよくやりとりをしている。その他社会福祉協議会にはチラシの配布やボランティア活動保険などでお世話になっている。瑞穂区役所福祉課にはチラシを置かせてもらっている。瑞穂区役所福祉課の繋がりについては職員の人が直接食堂に参加していた。また、あいち子ども食堂ネットワークがきっかけでいくつかの子ども食堂と情報共有をするようになった。いずれの繋がりに関してもみずほみんなの食堂の活動を知ってもらい、互いに協力しながら子どもや地域の問題に取り組みたいという思いがある。



8.考察

みずほみんなの食堂は「居場所」という面を強く押し出して運営しているが開催頻度として居場所にまでなるのは少し難しいと考えている。居場所として地域に根付いていくには開催頻度を増やすこと、もしくはみずほみんなの食堂が開かれていなくても訪れることができる場所にしていくことが必要だろう。しかし、今は居場所でなくともそれに準じるところにはなっているのではないだろうか。例えば子どもにとっては「遊び場」、高齢者にとっては「憩いの場」といった位置づけが的確だろう。みずほみんなの食堂は「遊び」を大切にしている。参加者が楽しめるもの、環境を考えてプログラムを考えている。民家のため広さは制限されるが、セッティングなど自由に変えることができて家のものを使うことができる。各回のプログラムに合わせて物を配置している。そのためいつものびのびと遊ぶことができる。民家ならではの馴染みやすい雰囲気や基本的には参加者は自由に過ごすことができるということも要因に含まれるだろう。こうして楽しみながら自主性を持ち、自己肯定感を養っていくことができるのではないだろうか。みずほみんなの食堂は特に子ども参加者の入れ替わりが激しく顔ぶれが結構変わっていることがある。参加人数は多い方ではなく、ボランティアの方が多いという回もある。それでも特定のよく来ている

子どもや高齢者の方はいる。その人たちにとってみずほみんなの食堂は「遊び場」、「憩いの場」、もしかしたら「居場所」にもなっているのかもしれない。

ボランティアの立場からしてもそういった場所作りにやりがいを感じ、そこに楽しみも見出している。あまり広くない場所で行われているため参加者との距離が近く、安定して関わることができる。そして知っている人ならば時間ができたときに立ち寄っていけるような気軽さがある。ボランティアの参加の申し込みは電話だけではなく SNS からでもできることから簡単に、そして雰囲気も和やかである。こういうことも相まってボランティアの数が多いと考えている。

また、「繋がり」の場所にもなり得るのではないだろうか。「遊び場」や「憩いの場」には必ずといっていいほど人がいる。前述した通りみずほみんなの食堂は参加者の入れ替わりが激しい。違う学校へ通う知らない子や同じ学校でも友達ではない子同士が同じテーブルでご飯を食べることもある。最初はぎこちない様子だったが、次第に声を掛け合い仲良く遊びだす。みずほみんなの食堂という場所を通していつもとは違う交流が生まれるのである。そこでの出会いで今までとは違う価値観や視点を知ることができる。また、みずほみんなの食堂には様々な人がスタッフやボランティアにいる。その中には福祉に高い関心を持っている人は少なくないだろう。仕事を生かせるという理由でボランティアに参加している人もいるくらいである。参加者の中に生活をしていく上で悩んでいることや困っている人がいるのなら、そういったことを気軽に相談できる場所でもあると考えている。相談することにより解決できる問題もあるが、あまりにも入り組んだ問題になると子ども食堂では解決できない。専門の機関が必要になってくる。大切になってくるのは子ども食堂と各団体の繋がりになるだろう。子ども食堂ではできなかったことが他の団体ではできることがある。参加者が他との繋がりをもつ手助けをすることも大事な役割である。

みずほみんなの食堂の他にも参加者が少ないといった子ども食堂はあるだろう。子どもよりも大人が多い状況もある。しかし、そこを必要だと感じている誰かが一人でもいるならば、その子ども食堂には続けていく努力と責任がある。続けていく上で必要なものは色々あるがその一つとして参加者だろう。ただ人数を集めればいいというわけではないが、その中には本当に子ども食堂が必要な子どもも混じっているかもしれない。地域ごとにどういった意味で子ども食堂が必要なのかは違ってくるだろう。「普通」の子ども達にとって子ども食堂に求めるものは食事を通した交流の場だと考えている。子ども食堂という場所を介して地域とのつながりを図り深めていくことを求めているのではないだろうか。そして理想はそこで成長の機会を得ることである。家でも学校でもない場所で養われる視点、自主性、自己肯定感は貴重なものになると考えられる。子ども食堂は子どものためだけではなく、誰かのための場所でもある。その誰かがいる限り、その子ども食堂は子ども食堂として意味のあるものだと考えた。

参考文献

名古屋市 http://www.city.nagoya.jp/shiminkeizai/page/0000036868.html(2018/2/8)